会社という器を生かし、超えながら社会とかかわる

ソニー株式会社
harmo事業室 サービスプランナー 西川翔陽（しょうよう）さん

常に社会への貢献を考え、「机の下」でも動き続ける

私が所属するｈａｒｍｏ（ハルモ）事業室は、クラウドシステムを活用した電子お薬手帳サービスを医療機関や薬局に提供しています。このサービスのきっかけは、私の上司が自らの闘病経験の中で「薬の処方歴を医療従事者により正確に、よりスムーズに伝えられるようにしたい」と考えたことでした。上司は最初、会社の了承を得る前に机の下で自ら企画・開発を進め、最終的には会社の事業としてサービス化させました。

「会社の了承を得る前に机の下で」は、ソニーではそれほど珍しいことではありません。２０１４年のＦＩＦＡワールドカップでは、日本代表と対戦したコートジボワールの無電化地域約10か所に、ソーラーパネルやプロジェクターなどを持ち込み、パブリックビューイングを設置しました。これは、民族間の対立が続く同国で、サッカーを通して人々をつなげたいというＪＩＣＡ（国際協力機構）職員からの呼びかけに、様々な部署から集まった有志社員約１００人が応えたものです。終業後、自主的なミーティングを数か月間重ね、各々の部署の上司を通して機材や渡航費の提供を会社にかけ合いました。

こうした活動は、長い目で見れば新しい市場でのソニーの価値を高めることになりますし、何より目先の利益にとらわれず、社会貢献という価値を見いだしたからこそ、多くの社員が集まったのだと思います。

会社の潜在能力を社員一人ひとりが引き出す

社会問題の解決にかかわりたいという思いを強く持ったのは、大学生の時です。高校時代の友人がうつ病になったことから、自殺問題の解決に関心を持ち、自殺を思いとどまった人たちの事例を記録し、予防に役立ててもらうウェブサイトの設立に携わりました。当時は、画期的な取り組みだとマスコミにも取り上げられましたが、一方で、年間３万人を超えていた自殺者数を減らすためには、別のアプローチも必要ではないかと考えるようになりました。

また、南米を旅行した時、貧しい集落で、子どもたちがブラウン管のテレビの前に集まり、番組を楽しんでいる様子を見ました。そこで私は、技術には人々の生活に喜びを与える力があることを実感したのです。そして、技術を適切に活用し、普及させることで、少子高齢化や環境問題などの社会問題を解決したいと考え、私は今の会社を選びました。

入社して実感したことは、この会社にはさらなる質的な成長余力があるということです。私が、南米やコートジボワールで感じた価値と、この会社がマジョリティーとして提供している価値とのギャップを感じることもあります。また、社員一人ひとりの目の前にはやらなければいけない仕事があり、１日の大半の時間はそれで過ぎていくかもしれません。しかし、優秀なエンジニアが数多くいるこの会社が社会に対してできることはまだまだあると確信しています。言い換えれば、この会社には、社会に対して貢献できる大きな潜在力を秘めているのです。

会社が社会にさらなる価値を提供し続けていくためには、会社に所属する私たち一人ひとりが、社会をよりよくしていくために、積極的にかかわろうという気持ちを持ち続けることも必要だと考えています。「机の下」をいとわない情熱は、これからますます求められると思います。また、一人ひとりが業務の中で自分のプロフェッショナリティーを高め続けることも大切です。言われたことをきちんとこなすだけでなく、業務の意味を自分の頭で考え、先輩の姿からも学ぶ。それでも、自分の知識や力が足りていないと感じたら、社外でも学ぶ。私も、経営企画部門に所属した際、先輩たちの議論についていくために、社外で会計学を学

びました。

社会の変化を生かして生き方を主体的に変える

最近、企業の中には、土・日・祝日や終業後に、収入を伴った他の仕事に就業する「兼業」「副業」を認めるところが出てきています。社会環境の変化によって市場が縮小したり、事業構造の改革が求められたりする中で、社員のやりがいや成長、社会貢献による達成感を重視して、兼業や副業を認めるのもこれからの企業の1つのあり方だと思います。

これは私個人の取り組みですが、今年から、東京大学の生産技術研究所に通い、食料生産技術特別研究会の社会実装に参加しています。日本の農業は、後継者不足が問題になっていますが、儲かる作物を儲かる方法で育て、儲かる販路をつくることができれば、若い人たちにとっても農業はもっと魅力的な仕事になるはずです。食料生産技術特別研究会は、工学と農学を融合して、高速育種や画像による作物管理など、革新的な食料生産技術を開発することを目指しています。私は、大学の研究と、農村地域の人たちが抱える課題を接続するコーディネーターとして研究会に参加し、主に週末に活動しています。この兼業についても、会社の役員たちは社会的に価値のあることだと捉え、「やるからには本気でやれよ。腰かけ気分では社会を変えられないぞ」と快く、しかしプロフェッショナルとして厳しい態度で許可してくれました。

にしかわ・しょうよう◎早稲田大学商学部卒業。2011年、ソニー株式会社入社。HQ経営企画部門を経て、現在の部署に所属。2016年より、東京大学生産技術研究所協力研究員。

会社における個人のあり方や一人ひとりの仕事のあり方は、これまでと大きく変わってきています。例えば将来、頭の中で考えた文章が自動的に入力される技術が開発されれば、キーボードを叩く業務は私たちの仕事の中からなくなります。自分の仕事は将来どんな風に変わっていくのだろうかと、不安になることもあるかもしれません。しかし、キーボードに向き合っていた時間を、考えたり、話し合ったりする時間に費やすことで、それまで以上にスピーディーに、しかもより自分の個性を発揮しながら、仕事の中に新しい価値を生み出すことができるようになると思います。

私は、社会の変化によって生き方、働き方を変えられているというより、変化を利用して自ら生き方、働き方を変えている感覚です。

変化を利用することで、自分の個性を生かして様々なことに挑戦できる可能性が広がっています。会社や国を越えて、時には机の下でこっそりと、社会問題にアプローチするプロジェクトに携わっているのもその挑戦の1つです。変化の激しい時代だからこそ、会社という器は、一人ひとりが人生を楽しむため、そして、自分たちの未来をよりよいものにするために集う場所として価値を高めていくのだと思います。

私が考える これからの高校生に求められること

社会に出る前に必要なのは、絶対的な感動体験だと思います。限界まで突き詰めて何かを成し遂げたり、1人ではできないことをチームで達成したりした経験が、他者にも感動を与えられる人を育てるのではないでしょうか。楽しいと思ったことに愚直に取り組み、やり切ること。私にとって、それは部活動でした。